
【短編】夢の先

鳥籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【短編】夢の先

【Nコード】

N81500

【作者名】

鳥籠

【あらすじ】

高校二年の夏。周りのクラスメイトと同じように、僕は進路をまったく考えていなかった。

高校二年の夏は学校生活で一番楽しい時期と言っけれど、それはたぶん生徒側の甘い考えだと思う。

なぜなら、夏休み前になると教師たちは口を揃えて進路のこと、主に受験について熱弁してくるからだ。

「進路希望調査の紙を配るから、終業式までに持ってくるように」
夏休みまであと1週間で切った。早く休みにならないかと浮き足立っているみんなをよそに、担任はホームルームを進める。

「ほら、喋ってないでプリントを後ろに回しなさい」
僕は前のやつからプリントを受け取り、後ろに渡す。

「せんせー、第三希望まで書かないとダメなんすかー？」

「そうだ、なるべく第三希望まで書いてくれ。まあでも強制じゃないから、どうしてもなかったら一つだけで構わないが」

それは良かった。進路なんて何も考えてないから、適当なのを一つ書けばいいや。

「それじゃあ今日はおしまい」

ホームルームの間に帰り支度を済ませておいた僕は、さつさと教室を出ようと席を立つ。すると後ろから肩を叩かれた。

「なあ柏木、進路希望なんて書く？」

「え？ああ、なにも決めてないから適当に書くよ」

「適当って、おまえ進学すんの？もしかして就職とか？」

「だから決めてないって。たぶん進学だと思うけどな。お前は？」

「あ、そんでさ。いまからゲーセン行くんだけど、柏木も行くか？」
聞いたって僕の質問には答ええないのかよ！

「悪いけどやめとくわ」

「あつそう、じゃあいいや」

「いやいや、誘ったんならもうちよつと食い下がれよ」

行く気はないけど、そんなあつさりされたら悲しくなるだろう。
「ええ〜。どーせまた生徒会だろ？」

「そーだけどさあ……」

「じゃ、また明日な」

そう言つてやつはいつものグループのところに走り去つた。

「ああ。つて、明日は休みだぞー」

遠くの方で「うるせー」と言つてた気がすけど気のせいだろう。

教室を出たあと、僕はまっすぐ三階にある生徒会室に向かった。
扉をノックして中に入ると、予想通り先客が一人いた。

「あ、柏木くん。今日もいらっしゃーい」

パイプイスに座つてだらだらしている三年生が、軽く手を振りながら僕を迎えた。

「こんにちは、先輩。今日も居ますね」

「生徒会長が生徒会室に居てなにが悪いのよ」

「授業サボるのは良いことじゃないです」

僕の指摘に先輩は体が固まっていた。

「さ、サボってないし！なに言つてんの柏木くん！」

「スカート、しわ付いてますよ。ずっとそこに座つてたんですよね」

「えっ？そんなことないよ！？」

そう言いつつ先輩は慌てて立ち上がり、ぐるぐるとスカートを凝視している。

「どこー？しわなんか付いてないよ？」

「嘘に決まつてるじゃないですか、座つたままなのにしわなんて見えるわけないでしょう」

「……引つ掛けたなー！」

「引つかかりませんよ、普通は」

「え、なにそのわたしがおかしいみたいな感じ」

「みたいなじゃなくて、おかしいねって話ですよ」

「むう、柏木くんのくせに生意気な！」

生徒会長の先輩と生徒会員の僕は、授業が終わるととりあえず生徒会室に来るのが習慣になっていた。先輩は授業サボっているイメージしかないけど。

特になにか活動をしているわけではないけど、生徒会室には無名の県立校では貴重なクーラーが設置されている。それだけでここに来る意味は十分にある。うん、涼しい。

「柏木くんは進路はどうするの？」

スクールバッグを枕にしている先輩から聞き飽きた言葉が出てきて、つい先輩を睨んでしまった。

「どーしたの、そんな怖い顔して」

「いえ、まさかここでもその言葉を聞かなきゃならないとは思ってなくて」

「この時期は先生たちがうるさいよねえ」

「わかってるなら聞かないでくださいよ」

そう言っただけ僕は机に広げたノートに目を戻す。
すると先輩が起き上がり、こっちを向いた。

「だって先輩としてはさ、かわいい後輩の今後の行方が気になるじゃない」

「そういうもんですか」

「そういうもののなの。それで、どーするの？やっぱ進学？」

興味津々の眼差しでこっちを見続ける先輩。僕はさっき友人に言ったことと同じように答えた。

それを聞いた先輩は、つまらなそうに「ふーん」と言った。聞いていてその反応は失礼じゃないか？

「柏木くんも案外ふつーなんだね」

「ただの高校生に異常性を求めないでください。そういう先輩はもちろん進路は決まってるんですね」

三年の夏ともなれば進路が決まっているはず。でも、あの先輩が受験のことを考えているとは思えないし、就職という柄でもないし

思う。そう考えた僕は、ちょっと嫌味な感じで聞いてみた。

「もちろん決まってるよ」

「えっ、決まってるんですか？」

先輩のことだから何も考えていないと思ってた僕は、びっくりして思わず聞き返してしまった。

「とーぜんでしょ！私が二トになるとでも思ってたの？」

「そうじゃないですけど。それで、進学ですか？もしかして就職とか？」

「進学だよー。私ね、なりたいものがあるんだ」

それは意外だ。毎日のらりくらりと過ごしている感じの先輩に、まさか目標があったとは。

「聞きたい？ねえ聞きたい？私の夢聞きたい？」

そんな満面の笑みで言わなくても。それと先輩、近いです。

「聞きますよ」

「あれ、めずらしく素直だね」

「普通に気になりますから」

僕の言葉に満足気な先輩は、胸を張って宣言した。

「私の夢はね、お医者さんになることなの！」

「またまたご冗談を」

「即答！？」

――

「暑い……」

今ってたしか十月だよな？そろそろ涼しくなってもいい頃だろう。それなのにこの暑さはなんなんだ。太陽頑張りすぎ、だれか休暇をあげてください。

「学校ももうちょっと衣替えを待ってくれてもいいのに」

この暑いのにブレザーなんて着ていられないっつーの。まあ教室

それから十一月に入り、本格的に寒さが増してきた。

「太陽さん、ゆっくり休んでください」

「え、なんか言ったか？」

ホームルームでざわつく教室で、前の席の奴がわざわざ振り返ってきた。

「別に、なんにも」

「そうか？それより、明日の古文が自習になってよかったよな」

今度はしつかりと体をこっちに向ける。ホームルーム中なんだからせめて前向いてろよ。

「って、え？明日古文ないんだ」

「さっきそう言ってたろ、なんかセンサーが風邪引いて体調悪いんだってさ」

「ふーん」

「学年でも風邪引きが多いらしいぞ。お前も気をつけろよ、って言ってもお前は大丈夫か」

ちよつと笑いながら言うのが気になった。

「なんでだよ」

「だってお前バカじゃん」

「……………よし、お前に一ついいことを教えてやろう」

「な、なんだよ」

僕は机の中からさっきの英語でやった小テストのプリントを見せる。

するとそいつはみるみる青ざめていった。

「顔色が悪いけど、風邪でも引いたんじゃないか」

「聞いてねーぞ……………柏木だけは俺の仲間だと思ってたのに……………」

「たかが小テストで大袈裟な」

「うるさい！もうお前なんか仲間じゃない！明日からは敵だからな！」

「……………とりあえず、座れよ」

勢いよく立ち上がって僕を指差すクラスメイト。そしてそれに近寄る担任。

担任はそいつの肩に手を置き、呆れた様子でそいつを注意した。

「まだホームルーム中なんだが、何か言いたいことがあるなら前に出て発言しなさい」

「ごめんなさい！」

ホームルームが終わって、僕はクラスメイトの誘いを断りすぐに職員室に向かった。

「失礼します」

扉をノックして中に入ると、三年生の担任を探した。

先輩ももしかしたら体調が悪くて、それがたまたま長引いて学校に来ていないと思ったからだ。

別の考えもあったけど、なるべく考えないようにした。

先輩のクラスの担任を見つけると、先輩が学校に来ていない理由を聞いた。

「なんだ、お前は聞いてないのか」

「聞いてないって、何をですか？」

担任は意外そうな顔で話を進める。

「いや、私はてつきり聞いているものだと。おまえ、生徒会長が休むようになってから様子を聞きもしないしな」

「いったい何の話だ？」

「何のことかわからないですけど、聞いてないので教えてください」

ところが担任はしばらく頭を悩ませてうなづいていた。

「しかし、本人が言っていないのに私から言うのも」

「もしかして、先輩の夢が医者になるって話ですか？」

「……………そうか、それは知っているのか」

なんでそんなに驚いてるんだ。というか、先輩はそんなことまで担任に話してるのか。やっぱり本気なんだな。

「うーん。そうだな、同じ生徒会員だし知っておいた方がいいかも

な」

勝手に自分の中で納得している担任。なんなんだいたい。

「誰にも言いふらすなよ」

「わかってますって」

それから僕は担任から詳しい話を聞いた。

話を聞いた僕は、あとで先輩を引つ叩こうと心に決めた。

学校の帰りに僕は少し、いやだいが寄り道することになった。

普段なら降りる駅を通り過ぎ、四つ先の駅まで行った。先輩の家に行くために。

住所は担任に無理を言っただけで教えてもらった。

見慣れない駅に降りて、そこから歩いて十分ほどで先輩の家に着いた。

「女の子の家に来るとか小学校以来だよ」

さすがに緊張するけど、ここまで来ていまさら緊張もなにもないだろ。

「よし……」

僕は震える指でインターホンのチャイムを押した。

出たのは先輩のお母さんと、先輩と同じ生徒会員の後輩であることを伝え、先輩に会わせてもらえないか尋ねた。

『失礼ですけど、お名前は？』

「あ、柏木です」

しまった、緊張してたせいか名前を言っていなかった。まず名前だろう！

心の中で自分にダメだしをしていると、

『柏木……あーはいはい、柏木くんね』

「？」

どうやら僕のことを知っている感じだけど、先輩が話したんだろうか。

『ちょっと待っててちょうだいね、いま開けますから』

「は、はい」

気のせいかもしれないぶんあつさりだったな。もうちょっと拒まれるかと思ったのに。

しばらくして玄関が開き、先輩のお母さんが二階の先輩の部屋まで案内してくれた。

「それじゃあゆっくりしてね。私は下にいるから何かあつたら呼んでちょうだい」

「あ、はい。ありがとうございます」

僕はかるく頭を下げてお礼を言った。

「でも、あんまり長くはあの子の」

「わかってます。話が終わったらすぐ帰りますから」

僕の言葉に安心して様子で、先輩のお母さんは下に降りていった。「さて、と……」

僕は深呼吸して気持ちを落ち着けて、扉をノックする。

「先輩、柏木です」

中から返事はなかったけど、バサバサと何かが落ちる音は聞こえた。

「先輩？入りますよ？」

そう言っ僕はドアノブに手をかける。その気配を察したのか、先輩の慌てた声が聞こえる。

「か、柏木くん！？ちょ、ちょっと待ってくれるかな！？」

と言われても、もうドアノブは回してしまったので、僕は勢いのまま扉を開けた。

扉を開けると、ベッドの上からずり落ちている先輩がいた。その手元にはたくさんのノートや参考書が散らばっていた。さっきの音は積んでたあれが崩れたのか。

「何してるんですか、先輩」

僕が呆れた口調で言うと、先輩はオロオロしながら怒り始めた。

「え、何って、何かな？そ、それよりどーして入ってくるのよ！待ってって言ったじゃない！」

「不可抗力です、僕はもう扉を開けてしまっていたので」

「で、でもさ！私が着替えでもしてたらどーするの」

「それはそれでいいですけど」

「……え？」

「なにか？」

しばらく先輩が落ち着くのを待っていると、先輩の口が開いた。

「それで、いきなり家に来るなんてどーしたの。びっくりするじゃない」

「はあ……。それはこっちのセリフです」

「……？どーいうこと？」

先輩は本当に意味が分からないと感じた。なんかさっきより腹が立ってきたぞ。

「ずいぶん長く学校をサボっているみたいじゃないですか。どういうつもりなんです」

僕の言葉に微かだけど表情を曇らせた。でも、それを隠すようにすぐいつものゆるい笑顔に戻った。

「えー、恥ずかしいからあんまり言いたくないんですけど」

「理由があるなら言ってください。言うまで帰りませんよ？」

もちろん、言っても言わなくてもすぐ帰るけど、そこは常套文句だ。

でも先輩にしては珍しく、素直に理由を話した。

「実はね、最初は夏休みボケが抜けなくてだらだらしてたんだけど、家にずっといたから体調悪くなっちゃって」

先輩は恥ずかしそうに照れているけど、全然照れる場面じゃないですよ。

「だから良くなるまで休んでただけど、結局家にいるからやつぱり良くはならないでしょ？それがループして今日まで続いちゃって」

「……はあ」

「あははは、ごめんね心配かけて、大丈夫だよ。でも柏木君に家ま

で来られちゃ、明日から行くしかないね」

「まったく……」

先輩、いつもの感じで笑っているつもりでしょうけど、全然笑えてませんよ。

「やだなあ、そんなに呆れないでよ。明日からちゃんと行くからさあ」

「……………こういう時ばかり嘘がうまいんだから」

「……………」

「いつもあたふたしてるくせに、なんでこういう嘘は冷静に言えるんですか」

「嘘って……………何のこたかな？」

なんでそんなに驚いてるんですか、わからないとでも思ってたんですか。どれだけあなたと一緒に居たと思ってるんですか。

僕は担任に聞いた話が本当だという確信を得た。覚悟はしていたんだけど、やっぱり心が折れるなあ。

思わず力が抜けて、僕はその場にしゃがみこんだ。

「か、柏木くん……………」

「……………なくていいですよ」

先輩は消え入るような僕の声を取り取るために近くに座り込む。

「どーしたの？ 柏木くん？」

「明日からも、学校、来なくていいです」

「なんで……………？ 学校に来て欲しいっていうことじゃなかったの……………」

顔をあげると先輩がすぐ近くにいます。僕は先輩の目を見つめて話します。

「知ってるんですよ、聞きました、いろんなこと」

「なに……………？ なんのことを……………」

ここまで言っつて、まだ平気な顔してとぼけますか。この人はほんと……………。

「先輩の病気のこと、ですよ」

「先輩が病氣って」

「先生も詳しく聞いたわけじゃないが、肝炎だそうだ」

「肝炎？」

「肝炎ってのは、肝臓に炎症が起こり発熱などの症状を来す疾患のこと」

「……それって、そんなに重い病氣なんですか？」

「いや、症状自体はそこまで酷くないらしい。でも肝臓の病氣だからな、癌なども発症することがあるそうだ」

「なるほど。……それで、先輩はいまどれくらいなんですか」

「どれくらいって。ああ……。お前は本当に頭がいいな」

「どうなんですか」

「進行率はまだそれほどじゃない。でも治療のためにも安静になきゃならない。私が言えるのはそれくらいだ」

「そうですか」

「……お前、妹さんのことは知ってるか？」

「妹？先輩のですか？聞いたことないですけど」

「まあそうだろうな」

「それが？」

「二年ほど前に、妹さんも肝炎にかかっていたんだ。そして、同じ状態だった」

「……妹さんのそれから？」

「あいつが医者になると言い出したのは、その頃だったよ」

先輩はきつと、妹が病氣死んでいくのを見ているだけだったのが嫌だったんだ。

でも、死んでしまった妹にはもう何もしてあげられない。

だから、せめて、妹と同じような子を助けたい、自分と同じような思いを誰にもさせたくない。そんな思いから、医者になろうと決めたんだ。

先輩はそれから凄く勉強を頑張っていたらしい。二年生になって、担任には医学系の大学に行くのは厳しいと散々言われていた。それでも先輩はくじけずに勉強を続けた。授業が終わったあとは教師に熱心に質問をして、放課後も担任と大学の受験傾向を調べ、家ではどんなに短い時間でも勉強を欠かさなかった。

前から肝炎にかかっていた先輩は、その極度の疲労から症状は徐々に悪くなっていたらしい。

そこで、少しでも休んでもらおうという担任の配慮で、受験に必要な授業は出席と最低限のレポート提出だけで良しとされ、空いた時間は人目を気にしなくて済む生徒会室での休憩が許された。

そしてついこの前、夏休みの間に希望大学を受験をして、あとは最終面接というところまでいった。

でも、それで安心したのか、それとも張り詰めていた緊張が限界だったのか、肝炎の症状が悪化した。

入院をして手術を受け、最近やっと自宅療養で様子を見るという形になった。

でもこうして部屋に着てみれば、枕元に大量の勉強道具が置いてある。自宅“療養”だってわかってない。

「先輩の病氣こと、肝炎だってこと、症状が悪化していること、全部知ってます」

「柏木くん……………」

本当は嘘だと思った。全部担任の冗談で、先輩はただ学校をサボっているだけだ。

でも、そんな都合のいいことがあるわけがなくて、先輩を見てま

すます現実味が増して、

「柏木くん？な、なんで泣いてるの？」

「なんでもないです……」

たぶん、これはきつと、悔し涙だ。先輩に気を遣わせまいと僕は袖で目をこする。

「……ごめんなさい、黙っていて。柏木くんに心配かけたくなくて涙を拭う僕を見て、先輩はあきらめたらしく、僕に話してくれた。ずっと黙っているつもりじゃなかったの。でも、いま言うのは中途半端な気がして。受験も終わってないし、症状も良くなってるわけじゃなかったし。だからちゃんと区切りがついたら、せめて受験が終わったら話そうって。」

先輩はそこで一度僕を見る。気持ちを落ち着けている僕は返事もできず、ただ見つめるしかできなかった。

そんな僕を見て先輩は小さく笑って、また視線を床に落とす。

「ううん、これも嘘ね。………本当はちよつと怖かったの。ほらわたしってさ、わがままだし、生徒会の仕事とかも柏木くんに押し付けてばかりだったでしょ。勉強することしか考えてなかったからさ、周りのこと考えないし。……だから、こんなわたしに、柏木くんがいつまで付き合ってくれるのかって考えたら、不安になったの。そんな不安な時に入院とかで学校に行けなくなつて、また柏木くんに迷惑かけて、もしかしたら、もう会ってくれないんじゃないかって」

僕は、俯いたまま話す先輩が震えているように見えた。

「そう考えたらもう、怖くて……。それなら、もうこのまま会わないほうがいい気がしちゃって。柏木くんの気持ちを聞くのが怖くて、逃げたの、わたし」

震える先輩を見て、今度は自分に腹が立ってきた。なんで先輩が泣いてるんだよ。………いや、泣かしたのは僕じゃないか。

あの時、先輩が学校に来てないとわかった時、すぐに先輩に会いにいったら良かったんだ。それで、たった一言、なんでもいいか

ら言ってあげれば良かったんだ。それだけで、先輩は安心できたはずなのに、なのに……。

「先輩」

僕の呼ぶ声に、先輩は顔をあげて僕を見つめる。そこには、とても哀しく苦しそうな先輩がいた。ああ、これも先輩なんだ。いつもの笑顔でゆるうい声で話すのも先輩で、たった一人の後輩に嫌われたくないと震えているのも先輩なんだ。

「先輩、そんな顔しないでくださいよ。そんな顔されちゃ、引っ叩こうと思っただのにできないじゃないですか……」

「あははは、ごめんね。でも引っ叩かれるのはやだな」

涙を拭って必死に笑ってくれる。でも、それはやっぱりいつもの笑顔じゃなかった。

僕はもう一度あの笑顔が見たかった。そのためには何を差し出してもいい。そう思った僕に、考えが浮かんだ。

「先輩、一つ約束してくれませんか」

落ち着いた先輩は、僕のいきなりの提案を聞いてくれた。

「約束？」

「はい」

「うん、いいよ。どんな約束？」

「先輩の……」

――

まだ肌寒さが残る四月、僕は三年生になった。

校長の長話が始まって長話で終わった始業式のあと、新しい教室でのホームルーム。

例によって、担任は進路希望調査のプリントを配っている。クラスが進路をどうするかでざわつくなか、僕は迷うことなく三つの欄を埋めた。ホームルームが終わり、すぐさま担任にプリントを渡す。

「なんだ柏木、もう書いたのか」

「進路は決まってますから」

「ほお、それは関心だな。それで、進学するのか？」

担任は言うと同時にプリントを受け取り、目を通す。

「ん、こんなレベル高いところ行くのか？まあ、柏木の成績なら問題ないだろうが、どうしてここなんだ？」

「目標があるんです」

当然の質問に、僕ははっきりと答える。

「目標？夢でもあるのか」

「はい。僕の夢は、医者になることです」

「医者か。なんでまた突然医者なんだ？」

「そう約束したんです。一緒に医者になると、約束したんです」

（後書き）

プロット無し。執筆時間約8時間。意見・感想は誹謗中傷でなければなんでもください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8150o/>

【短編】夢の先

2011年2月5日04時40分発行